

1 . 序 言

分子科学研究所の外部評価が1993年から3年ごとに行われ、本年度は3回目を迎えている。私自身前2回、評価委員として参加したが、今回は、評価を受ける立場となった。国の内外からの評価委員の方々に篤く御礼申し上げる。

分子科学研究所が創設されて25年目、2000年という新しい時代を迎えた。この間、分子科学を巡る周辺分野は、大きく変化発展し、分子レベルの生命科学、単電子素子など、21世紀はまさしく「分子レベル」で物事が論じられる時代である。「分子レベル」の先導的研究を行う分子科学研究所が、時代の先頭に立って発展するためには、研究所内外での分野の垣根を乗り越えた交流と、研究所独自の方向付けが必要である。今回の外部評価、また研究所での将来構想委員会、運営協議員会での共同利用研究の在り方など、さまざまな討議と検討の結果を踏まえて、分子科学研究所は21世紀に向けて変革を遂げるべきである。

平成12年度から岡崎国立共同研究機構3研究所の協力体制が、「統合バイオサイエンスセンター」という生命体をターゲットとした研究推進施設という形で具現化する。物質創製、光分子科学、反応ダイナミクスなどを柱とする分子科学研究に、それらを総合して研究するべき格好の複雑系が生命体であり、統合バイオサイエンスセンターへの参画によって得た研究成果が、分子科学のさらなる発展を生むことを確信している。

本レポートは、その指揮をとられた平田文男教授、広報担当の佐藤敦子さんなど、多数の方々の努力によって作成されたものであり、篤く感謝する。

平成12年2月
分子科学研究所長 茅 幸二